未来の住環境管理

奈良女子大学生活環境学部

梁瀬度子

Ⅰ．家政学の新しい視点

この半世紀足らずの間に，世界各国において衣食住のスタイルをはじめとして人々の生活環境が大きく変化し，生活に関わる価値観や思想そのものが大きく変革した。また，最近では家族の姿や生活圏も大きく変わりつつある。

日本家政学会では、すでに１０年余り前に家政学将来構想特別委員会を設置し，家政学の将来における新しいビジョンについて検討を行った。しかし，その後１０年の間に社会の変化が予想以上に急速に進み，現在では家政学の名称問題や対社会活動のあり方などが新しい問題として浮き彫りにされていることから，１９９４年に再び家政学将来構想特別委員会を設置して２１世紀を目指す家政学の方向について検討を行った。

この半世紀は家庭における機能を研究することを目的として出発した家政学が，様々な基礎科学や応用化学の助けを借りて理論化・体系化する時代であったといえる。しかし，人口が増加し続け科学技術の長足の進歩などにより生活が豊かになると，視点を家庭やその周辺のみに置くのではなく，グローバルな範囲にまで広げていかなければならなくなってきたのである。

Ⅱ．住環境の今日的問題

(1) 住生活に求められる豊かさとは

現在，日本では住宅に関する若い人の興味や認識が深まっており，問題意識が広く捉えられるようになってきている。

人間にとって住むということは最も基本的な生活行為であり，人間の生活が住まいとそれを取り巻く環境の中で成り立っていることは，周知のとおりである。今日，韓日両国では衣・食は質・量ともに充足される時代となり，住に関しても質的向上に目が向けられ，より豊かでより快適な環境が求められるようになって来ている。しかし，豊かな生活と一口にいっても物質的な豊かさ，つまりハード面での豊かさのみでは快適な環境を作りだすことは出来ない。そこには質的（精神的）な充足，つまりソフト面の豊かさが必要なのである。

有名な人間性心理学の創始者の１人であるアメリカの心理学者Ａ．Ｈ．マズローによると，行動発生のメカニズムつまり動機づけ（Motivation）に関し，欲求段階説を提唱している[1]。すなわち，生命を維持するための最低限の生理欲求をはじめとし，安全な場所に身をおきたいという安全欲求，家族の一員として存在を認められるとともにお互いに愛し愛されたいという帰属・愛情欲求（社会欲求），お互いに尊重しあう尊敬欲求，そして自己の存在を示すとともに意思を実現させたいという自己実現欲求などである。

普通，下位の動機づけが満たされたら上位の動機が現れ，順次上位の欲求へと向かう。生命を維持する生理欲求から，最終目標の幸せな生涯を送り充実した生活をするためには質的に高い欲求の実現が求められる。住まいに求められる豊かさとは質的な豊かさを言うのであり，快適に住むためには，質的な上位の欲求の充足こそが重要なのである。

(2)山積する住環境の問題

近年，世界中の国において共通する現象として情報化，高齢化，少子化傾向が著しく，加えて女性の社会進出も増加の一途を辿っており，これらの傾向は今後も次第に著しさを増していくことが予想される。このような中で，わが国における特徴的な現象をあげると，社会情勢の大きな変化は家政学および家政学の中心対象である家族，家庭に大きな影響をもたらしており，高齢化・少子化という表裏一体をなす現象も急速に進展しつつある。また，女性の社会進出に伴って，職場，地域，家庭における役割分担に関して従来の考え方の変容が迫られており，住生活における管理のあり方にも変化をもたらしている。さらに，環境問題は世界的に重要且つ緊急を要する問題であるが，とくに住生活との関連が密接であり，自然との共生を目指したエコロジカルな視点からの問題に取り組む必要がある。

Ⅲ．新しい側面からの住環境の管理

上述した社会情勢の変化からくるさまざまな今日的問題について，その解決の視点をさぐるとともに今後の住環境の新しい管理のあり方について，いくつかの側面から述べてみたいと思う。

(1)高齢者，障害者，子どもの立場からの住環境の整備と管理

日本は今や世界一の長寿国となり，高齢化は今後も急速に進んでいくと予想されている。その反面，子ども数の減少は将来，高齢者を介護する人口の減少化をもたらすことになり，今後は高齢者が自立・自助の生活を出来るだけ長く送れるような住環境の整備が必要であり，生活支援システムの内容とあり方の研究の必要性が高まるであろう。

質的に住みやすい環境づくりを行うことは，その結果として誰にでも住みよい環境づくりをすることになるのである。また，女性の自立を助け社会進出をサポートするためには，保育所，ストアーなどを始めとした地域生活施設の整備の重要性が増してきている。

(2)都市化の進行に伴うさまざまな住環境管理

人口の都市への集中が問題化されて久しいが，都市化の進行に伴う住まいの集住化は避けられない現象である。集合住宅は多くの人，多くの家族，多様な価値観の人々が共用・共有する空間を持ち，共同する住宅である。その中で様々な住要求（欲求）の発展に対応しながら快適な生活を維持していくための管理問題の重要性は殊の外大きい。従来の保全的な維持管理のほかに，組織づくりなどの運営管理や全ての人々が秩序ある居住環境を平等に享受できるような，生活秩序を形成していくための管理のウエイトが大きくなるであろう。これからの居住環境づくりには居住者のしっかりした権利意識が必要となり，そのためには，２１世紀を担う子どもたちへの住環境教育にも重点をおくことが大切である。

(3)技術革新と住環境管理

これからの住環境づくりの上でとくに重要な問題として，技術革新があげられる。近年のハイテクと呼ばれる高度先端技術は，技術革新を加速度的に進展させ家庭生活にも大きな影響をもたらしている。今後もますます進歩する高度情報化社会に適応したホームオートメーション（ＨＡ）の活用，例えばホームセキュリティーシステムやＨＡと外部とを結ぶキャプテンシステムの普及により住生活の管理は新しい方向性が示唆されている。技術革新と生活とのかかわり，従来の生活の個人化を主体とした考え方から共同化への方向づけを考えていく必要がある。

以上，これからの住環境学は，快適な住環境をいかに計画し管理していくか，そのテクノロジに関する問題について考えることに主眼をおき，社会情勢の変化に対応した住環境の新しい管理のあり方を探るとともに，社会の要請に応えられる研究課題に積極的に取り組み，水準の高い研究成果をあげていかなければならない。

生活は，それを取り巻く環境との相互理解によって形成されるものである。より良い環境を作っていくために，生活者主体の環境づくりに向けて環境の変化に目を向け，それらへの適応と共存を図ることが大切である。

文献

1)ﾏｽﾛｰ, A. H., 小口忠彦監訳：人間性の心理学，産業能率大学出版部, 1971